はじめに

人獣共通感染症教育プロジェクト　委員長
堀井　洋一郎

20世紀の後半、日本をはじめ多くの先進諸国において人類は感染症の恐怖を克服できたと感じた時代があった。抗生剤を始めとする多くの薬剤やワクチンの開発により感染症は過去の病気、あるいは発展途上国の病気であると医学教育の専門家も信じるようになった。その結果、多くの医学部で感染症関連の講座や人員の縮小が加速され、新たな他の疾病対策に振り向けられていった。これは時代の流れとともにある程度受入れねばならない現象であったとしても、この代償として感染症を良く理解する医師の減少につながったことも否定できない。しかし近年、物流や人の動きなどのグローバル化が急激に進む一方で、重症急性呼吸器症候群（SARS）の流行に代表されるような新興の人獣共通感染症の恐怖が世界を脅かしている。本来国外に存在する感染症が散発的に国内で見られる場合、輸入感染症と呼ばれてきたが、もはやそのような言葉が当てはまらない規模の新たな感染症の発生が危惧されている。感染症においては先進国と発展途上国との距離が一気に縮まったことを認識せねばならない。一方、我々獣医学の領域においては動物の感染症は現在でも身近な存在であり、その対策はそれほど単純なものではないことは十分認識されている。一部の地域が感染症フリーになると、かえって急激な感染症のリスクが高まることを既に経験している。そのため動物における感染症対策は、臨床や行政など様々な分野における獣医師の感染症に対する高度な知識、考察力と正確な判断が重要であることは言うまでもない。また多くの動物の感染症が潜在的に人の感染症になりうることが常識として理解されるようになってきた。従来の「動物の感染症」と「人の感染症」の区分が大きく変化しているなかで獣医学領域における感染症教育の重要性は格段に増大している。このことから、宮崎大学は獣医学科と医学部が連携し、動物の感染症はもとより、人獣共通感染症を動物と人の両側から重点的に教育し、感染症に対応できる優秀な人材を育成することを試みた。「人獣共通感染症教育ガイドライン」のタイトルのこの冊子は、平成17年度から開始された文部科学省特別教育研究経費による「人獣共通感染症教育モデル•カリキュラムの開発」の成果報告も兼ねたものであるが、関連教員が膨大な時間と労力を費やした試行錯誤の結果でもある。施設改善などの予算を伴う部分も重要であることは事実であるが、教員相互が目的意識を共有し協力することで改善できる部分も多いことを強調しているつもりである。反面、カリキュラムを充実することだけでは解決できない学部教育の問題点も明らかになってきた。臨床や行政の現場に立って、感染症に対するモチベーションの上がった獣医師を対象とした卒後教育の重要性も大きく、感染症教育はエンドレスで取り組むべき課題である。

2010年の宮崎県や隣国である韓国の口蹄疫の大発生に直面し、獣医学教育における感染症教育の重要性を今更ながら身にしみて痛感した次第です。感染症教育に関わる教員として今後のたゆまぬ改革とそのための努力を惜しまぬことの大切さを肝に銘じ、皆様への感謝の言葉と致します。小冊が感染症教育に関わる多くの皆様に些かでも貢献できれば望外の喜びです。